

この論文は、特別支援教育に関する実践を基にした理論的、実証的研究である。特に、自閉症スペクトラム(ASD)児の対人関係を向上させるため、心理劇に童話の導入に着目し、小学校の通級指導教室での実践を通じて論考を行っている。

論文は、次の12章で構成されている。序章では、発達障害児に対する通級指導教室での指導内容を概観し、ASD児には主にソーシャルスキルトレーニング(SST)が行われていることを明らかにしている。第1章は、心理劇導入以前に行った通級指導教室の3事例より、教科補充より自立活動を行うべき、自立活動で行ったSSTを集団場面で生かすには般化プログラムが必要であることを論じている。第2章では、通級担当教師にアンケート調査を行った結果、SSTのやりにくさを指摘する意見が多く、新しい指導技法の開発を待ち望む声があることを示している。第3章では、精神障害者の治療方法として考案された心理劇が発達障害者に適用されるまでの経緯を述べ、心理劇を学校に導入するには、原型を変形させる必要性を論じている。第4章では、童話を筋書き通りに演じさせる心理劇を「心理劇的アプローチ」と名づけ、小学校の通級指導教室でASD児に実施する手順を示している。第5章(事例1)は、心理劇的アプローチを3年男子2名に12回実施し、集団への参加意欲が高まり、仲間意識を持ったりしたこと、第6章(事例2)は、5年女子と4年男子に15回実施し、こだわり(固執性)が減少し、劇で勝つ体験をしたことで自己肯定感が高まったこと、第7章(事例3)は、3年男子2名に22回実施し、相手を見下した態度が好意的な態度に変わり、劇で形成された自信がグループ活動での積極性につながったこと、第8章(事例4)は、4年男子2名に20回実施し、日頃の願望が劇の中で実現できたことで満足し、協力的になり、セリフを言うことで発語が促進したこと等を報告している。第9章は、4つの事例を総括し、集団への参加意欲の高揚、仲間意識の芽生え、こだわり(固執性)の減少、思いやりの心の育ちの4つの成果が表れたことを論じている。第10章では、心理劇的アプローチは、児童が主体的、意欲的に取り組むことができるという長所がある一方で、担当教師が1人で監督と補助自我を兼務しなければならないという短所を提示している。そして、第11章では、心理劇的アプローチを成功させるためには、なるべく児童が希望する童話を取り上げ、かつ、事前準備を周到にしておくことが重要であるとしている。終章では、今後の課題について触れ、ASD児以外に対象児童を拡大して行うなど心理劇的アプローチの可能性と限界について検討している。

この論文は、理論、実践、検証、考察等が精緻に記述され、データや資料も添付されており、反証可能なものであり、この分野の実証的研究としては先駆である。また、特別支援教育の今後の発展に多くの示唆を与える教科開発学の観点からの論考であり、本教科開発学専攻の学位論文に値するものである。

以上から、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。

(論文博士・様式1.4)

令和 4年 2月 8日

論文審査・最終試験結果報告書

申請者氏名	長田 洋一
論文題目	自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的 アプローチの開発 —小学校の通級指導教室における自立活動の授業実践を通して—
論文審査結果	合
学力の確認結果	合

(論文審査・学力の確認・最終試験結果の要旨、1000字程度)

(裏面参照)

論文審査・学力の確認・最終試験結果の要旨

最終試験は、30分の研究内容の発表と約50分の質疑応答によって行われた。30分の発表では、論文の概要、論文の構成（序章～終章）についてのプレゼンテーションが行われた。内容は以下の通りである。

プレゼンテーションは、「心理劇的アプローチの実践」を中心に置き、実践の前は「心理劇的アプローチが成立するまでの経緯」、実践の後には「心理劇的アプローチに対する考察」の3部構成である。「心理劇的アプローチが成立するまでの経緯」では、「心理劇を導入する以前に通級指導教室で行った3つの先行研究」や「通級担当教師に対するアンケート調査の結果」からASD児の対人関係を向上させるために心理劇を導入した経緯を説明し、心理劇で筋書き通りに童話を演じさせる理由についても論じた。「心理劇的アプローチの実践」では、4つの事例の中から3つを抽出し、各児童にみられた変化を劇場面の動画も添えて実証した。また、事例ごとに実施の条件(回数、童話の取り上げ方、映像によるフィードバックの導入)を変えて実践を行い、各事例でみられた成果を検証した。「心理劇的アプローチに対する考察」では、8名の対象児童にみられた変化を「集団活動への参加意欲の高揚」「仲間意識の芽生え」「こだわり(固執性)の減少」「思いやりの心の育ち」の4つに分類し、変化した理由についても説明した。総括として、心理劇的アプローチが持つ長所と短所、心理劇に童話を導入した意義について論じた。

次に以下の点を巡って質疑応答が行われた。1) 児童の能力の判定基準、教育評価の枠組み等は妥当か。2) 教育効果はどの程度持続するのか。3) 心理劇の実践に児童の年齢の影響等はあるか。4) 研究結果はどこまで一般化でき、実際に教育に応用可能なのか。5) 未解決の問題・課題は何か。いずれの質問に対しても、的確に回答することができ、自身の研究内容について深く理解していると評価できた。

学力の確認では、教科開発学に関する論文を読み、自身の考え・意見等を述べ、それについて審査員とやりとりを通じて、関連する学問的な内容についても深い知見を得ていることが確認できた。英語力の確認では、博士論文の要旨の英訳を行い、英語圏での研究を参照する意義と可能性、教育研究においてどの程度英語と接しているか等の質疑応答を通じて研究に必要な英語力を備えていると判断した。

以上の点と、別紙の「審査概評」に述べたことを合わせて、最終試験の結果は「合」と判断した。

審査委員長

野 牙 慎 二

